



Title	ヘリテージイズム・ワーキングの取り組みから考えたこと
Author(s)	原田, 喜久栄
Citation	先住民文化遺産とツーリズム：北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism – Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51252
Type	conference presentation
Note	セッション2: ヘリテージツーリズムの取り組み
File Information	session2report2.pdf



[Instructions for use](#)

International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

『ヘリテージツーリズム・ワーキングの取り組みから考えたこと』

原田 喜久栄

(Team Nikaop, Hunpe Sisters 所属)

私がヘリテージツーリズムワーキング（以後、WG）と関わるようになったのは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターが「エコツアーガイド養成講座」の生徒を応募した際に、それに応募して生徒になったことがきっかけである。WGメンバーの一人である門脇こずえさんと二人で北海道大学の授業に出て、月一回開催されるエコツアー会議に出席した。課外活動としては、北海道大学周辺、札幌駅周辺、登別、知床、沖縄といった場所を巡検して、各地での自然・文化資源を生かしたツアーガイドの実態をみてきた。

沖縄巡検の報告書を書いたとき、私が描いた宮古島のパーントゥという厄除けの絵を見たWGのメンバーが、その絵を褒めてくれた。そこで私は、文章とイラストを織り込んだWGの4年間の報告書を作る時に、ガイドツアーを実施した知床ガイドブックのイラストを描くことになった。私は、報告書作成にも携わったが、素人だから文章や絵が下手なうえに、アイヌ語が間違っていたりと散々であったが、何でもやってみることに意義があると思っている。ガイドブックも出してみないと、どこがダメか、分からないのでやってみようと思った。

挑戦することが大事と、これまでツアーガイドもやってきたが、そのスタンスだと不特定多数の人に対しては、ガイドはできない、と最近気づいた。私が今までやってきたガイドは、知り合いとか友達とか、もし間違っていたら、後で会った時に、間違いを訂正できる人ばかりであった。しかし、これからは、それでは駄目である。私のガイドを何回か聞いた人なら分かると思うが、その時々で内容が変わってしまったりしていた。その前の日に初めて知ったことを言ってしまうたり、人から聞いたアイヌ語を言ってしまうたり、ある人との会話をベースに説明をしてしまったり、いい加減な部分があることに自分でも気が付いた。今までは「勉強中だから」と言って逃げていたが、これからは自分が何をしたいのかを自分で決めて責任を持ってやろうと思う。

私は今年で45歳。もっと早くにアイヌの勉強始めればよかったと思う反面、年を取ってからで良かったと思うこともある。若いときだったら、こんな風にアレやりたい、コレやりたいって図々しく言えなかった。

物心つく前から、アイヌの踊りを人前で披露することに慣れていた私にとって、舞台に立つということは、当たり前前で、子供のころから緊張することがなかった。「私、アイヌですから、舞台に立ちますけど、何か？」って気持ちでいた。本当に、少し前まで、そんな不遜な態度で舞台に立っていた。

姉たちと一緒に十勝の歌、踊りを世に広めるために結成しているアイヌユニット、フンペシスターズとして、初めて海外に行った。フィンランドのサンタと白夜で有名なロヴァニエミの

ユタヤイセット・フォークロア・ミュージック・フェスティバルに呼ばれて、他の国のプロで世界ツアーを回っている途中のザンビア、ロシアのマリ、イタリア、トルコ、ブルガリアの人々と交流して、初めて、「ああ！私って選ばれて、この舞台に立たせてもらっているんだ。ここに発ちたくても立てない人を押しのけて、私が代表としていなきゃいけないんだ」ということに気が付いて、今までの自分の態度が恥ずかしくなった。

私が付き合っている人たちに偏りがあるのかもしれないが、アイヌと、アイヌに関わっている人で金持ちに出会ったことがない。それでも、この世界にいるのは、アイヌとして、アイヌの事を知りたいからである。ちょっと前なら、アイヌの「ア」の字も表に出せない時代もあった。でも、今はアイヌで踊りを踊っていると取材が来る時代である。私の働いているスーパーの担当者も、「アイヌの活動がしたい」という私の希望を受け入れてくれて、接客商売にも関わらず、一週間休みをくれてフィンランドに行くことができたり、土日でも他の人に無理を言って頼んでも踊りに行かせてくれたりと、サポートしてくれる。そんな有難い職場なんて、考えられない時代が本当に少し前まであった。これが私のタイミングの良さだと思う。その状況をありがたく思いながら、アイヌの勉強、活動、賭せ活を両立させてもらおうと思っている。

WGの一環で、2010年と2011年に知床のウトロを訪問した。2010年は、まだまだガイドとしての心構えもなく、ウトロって良い所だな、と思うくらいであった。アイヌが経営している「酋長の家」という旅館のおかみさんにすごくよくしてもらったり、知床グランドホテルで行われた語りを聞きに行ったりもした。2011年は、体調が非常に悪く、なかなかガイドに集中することが出来なかった。それでも、自分なりのガイドブックも初めて作ってみるなど、ガイドとして自覚が少し芽生えてきたような気がする。

私なりに、これまで巡検したところを振り返ってみる。

知床のウトロは、行くまでの高速バスが辛い。行けば良い所だが、ウトロまでの道のりが遠い。遠くて大変と言えば、阿寒も同じで、交通手段が問題だと言える。交通手段にお金がかかり、盛り上がり欠ける状態が続けば、もう阿寒はいいや、白老、平取でいいやということになりかねない。平取の場合も、鉄道はなく、バスも一日2本だけという交通の便での問題点がある。しかも、最終的には車ないと不便であるので、内地からの観光客のアクセスが悪い。

対して、札幌は交通の便は非常に良いが、案内する場所に困る。「キクちゃんに行く北大ツアー」と題して、なかば無理やりアイヌとひきつけて北海道大学構内を案内しているが、まだまだお客様に満足してもらえるようなものにはなっていない。アクセスが良くても、魅力がないならどうしようもない。こうした課題点を、トータルプロデュースする人が必要だと思う。それを今、このWGでやろうとしているのだと思う。北海道なら、どの土地にもアイヌのにおいがするものがあるのだから、それらを掘り起こして、魅力を伝えないともったいないと思う。その急先鋒として私がいるのだろうか。まだ、自信はないが、何をやりたいのか決めて、やる為には何が必要なのか、だれとやるべきなのかを考えて、自分が行動しなければ、何も動かない。せつかく、アイヌがガイドするのだから、ガイドの中に歌と踊りも組み込んでみたいと思っている。歌と踊りは、私が自信を持って人々に伝えられることだからである。